

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	ガンジーを中心として
Author(s)	大山, 岩雄
Citation	龍南會雜誌, 194: 17-27
Issue date	1925-07
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8805">http://hdl.handle.net/2298/8805</a>
Right	

# ガンヂーを中心として

大 山 岩 雄

## 一、前 言

西歐の一大思想家ロマン・ローランはその『トルストイの生涯』の冒頭に曰ふ、『最近に消えたばかりの光明は、私と同時代の人々にとつては、その青春期を輝した最も純なる光であつた。十九世紀後半の佗しい暗い黄昏時に、それは慰安の星となつて輝き、その眼差は吾々青年の心を蠱惑し、且つ慰撫して呉れた。……』と。

私は敢て西歐の思想家を眞似ねるのではないが、ボルガを母とする、露西亞の、あの、なつかしくも偉大なるトルストイの友人であり、現に無抵抗主義を標榜し、眞理を祖國よりも尊び、その熱烈なる愛の焰は燃ゆるが如き愛國心となり、同時に全人類をその大いなる光を以て導きつゝある印度の燒けるが如き改革者ガンヂーは、その人類愛の偉大なる『光明』は、『私と同時代の人々に取つては、その青春期を輝し』て呉れる『最も純なる光である』と信ずる。

そは、創造の歡喜と新生の澄澗さとを以て輝かされねばならぬ筈の二十世紀の初の二十五年が、痛ましくも醜い人類の兄弟相殺的な戦争に依つて『佗しい、暗い』ものにされて、世紀末的頹廢の風が全世界を旋風の如く吹きまくり、一大社會崩壞の、悲しくも、正に暮れなんとはするが、やがて甦生の喜びを以て曉鐘のキビ／＼した響が、全宇宙に鳴り渡つて紅とばす大朝の來るであらうことを期待される『黄昏時に』それは社會的不安の中に蠢き、動搖する全人類の『慰安の星

となつて輝き』つゝ、暗闇の中を通して全人類を導いて呉れ、その『柔和な黒い……どちらかと云へば、大きい飛び出した眼差は吾々青年の心を蠢惑し、且つ慰撫して呉れる』ものであると信ずる。

X X X X

一、印度……

遠きアリアンの昔に歸る民族移住の時代は問はずとするも、近世の印度の歴史は、壓迫されたるものの、踏みつけられたるものの歴史である。三千年來の光輝あるウパニシャッド *Upanishad* の哲學が、近古西歐の物質文明の下に、押しつけられたる歴史であり、踏みつけられた三萬ヒンズーの生活である。一年の中の半分は、人間をむし殺すかのやうに熱い、あの印度されど他の半分はパラダイスの様に住み心地よいあの印度の、ガンジス河の流域の綠野には、何時の間にか、ウパニシャッド哲學の殿堂は蜃氣樓の如き、淡い夢と消え去り、人の子をして、ラスキンがいはゆる、*an animated tool* と化せしめる近世工場の殿堂には産業將軍が嚴然と鎮座し、百萬の勞働者を驅使して、曾ては春鳥の楽しく舞つた印度の谿谷は今、人の子の忍び泣く『涙の谿谷』と變つたのである。

十四世紀、ルネッサンス時代に種が蒔かれ、十六世紀初葉に芽を吹き出した西歐の産業革命の成長するに連れて、英國は云はずもがな、佛、和、西、伊の諸國は遠く南阿の *Cape of Good Hope* を迂回して東亞の地に來るや、期せずして此處に一大殖民地爭奪戦は繰返へされたのである。此の時以來、印度は英佛の蹂躪地となり、西曆一千七百六十二年以來、英國は、印度に於いて *domination* を獲得したのである。爾來、今日に至る迄、印度は英國の極端なる資本主義的政策の筈下に苦惱し、のたうち廻つたのだ。けれども一九一四年に始まり、一九一八年の *armistice* に終つた世界大戰の一結果は資本主義の没落と民族自決の運動とであつた。此の渦中に投ぜられた印度は、早くも大戰中より、英國との間に暗示された『

自治の認許』に輝しい未來の希望を置くと共に、英國の政治家を信頼して、『九十八萬五千の兵』と云ふ莫大な犠牲を拂つて、本國を援助したにも拘はらず、ロマン、ローランの言葉をかりて云へば、『目醒めは恐ろしいものであつた。千九百十八年の末には危険は過ぎ去り、印度人の捧げた奉仕の記憶は消え去つた。休戦條約の調印後、英國政府は最早や倅りを云ふ必要が無くなつた英國政府は約束の自由を許す所か、己に存在した一切の自由をさへ中止した。……』此處に於いて『全印度は憤怒のために爆發した。叛亂が起つた。ガンデーは此れを指揮した』のだ。

火のない所に煙は立たぬ。壓迫のない所に反逆はない。反逆があるから壓迫があるのではない壓迫があるから反逆があるのだ。過去數世紀の間、屈從と忍辱の荊の下に蠢きなやんだ印度國民の獨立運動は正に、彼等の人間復歸の爲めの戦ひなのだ。生命掛けの戦ひなのだ。彼等は生命を要求してゐる。牛の本能の狂奔するまゝに生きるのだと叫んでゐる。其處に彼等の運動は始まる。彼等の運動は即ち、生きんとするものの戦ひである。生きんとする人間本能の具体化である。生氣のある力のこもつた戦ひである。此の、うるほひのある生命の戦闘そのものの中に彼等の未來が啓示されてゐはしないか。

X X X X

#### 一、ガンデーの文明觀

私は初め、ガンデーの生ひ立ちや、彼の南阿及び印度に於ける活動について、少しばかり云つて見たいとも思つたが、時間がない上に、そのことは已に充分ロマン、ローランの『ガンデー論』の中に書きつくされてゐるから、敢えて重複を避けて、此處では云はないこととして、私の最も注意を惹いた此の新時代の改革者であり、先驅者である『ガンデー』彼自身の文明觀を瞥見し、併せて、ミルガ、カーフワイルと共に英國ヴクトーリア王朝時代に於ける同國社會批評壇の三巨

星の一人と稱せられ、藝術批評家であり且社會改良家であるジョン・ラスキンを想起し、非才乍ら、私の彼等の文明觀に對する卑見を述べて見たい。

簡単に云ふならば彼の文明觀は、『絲車主義』の一語につきる。ロマン、ローランは明快に云つて除ける。ガンデーは『英國の機械の後繼者としての自由な印度よりも、寧ろ英國の市場に頼りかゝつてゐる印度を選ぶのだ。印度に、マンチエスターの會社を立てるよりも、マンチエスターで製造せられた品物を買ふ方がよいのである。……』しかし、彼は機械文明を排斥する。現代は鐵と石油の時代である。鐵と石油が全人類をひつぱつて、暗黒の中へと導いてゆく。綱鐵は現代の人類を引つぱる汽罐車である。(鐵は人間を奴隸にする。)彼は鐵を蛇蝎の如く忌み嫌ふ。かるが故にこそ、ガンデーは、全印度に絲車主義を宣傳した。彼の人格の偉大さに敬服する全印度の國民は一齊に手織の衣服を身にまふことに満足したのである。曾つて「ガンデー」が手織の麻の衣をケムンシタインの詩人タゴールの下に送つた時、タゴールは『ホー此は涼しい上に、あつさりしてよい……』と云ふたとのことである。私がガンデーの文明觀に接すると同時に頭に閃めいたのはラスキンの文明觀であつた。兩氏の近世資本主義的文明に對する態度は殆ど全く同一であると云つてもよからう。十九世紀の後半と云へば、正に近世資本主義がその隆盛の頂點に向つて、最大速度で進行してゐた時代であつて、ラスキンが恰度、その名著『Unto this last』その他に依つて、彼の人道主義的立場から可なり頑固な中世紀論に立て籠つて資本主義文明に冷罵を浴びせた時代と一致する。今、手下にある彼の著書から、ほんの一部の一部を掲げるなら、次の如くである。

「…… We have much studied and much perfected, of late, the great civilized invention of the division of labour; only we give it a false name. It is not, truly speaking, the labour that is divided; but the man: — Divided into more segments

of men — broken into small fragments and crumbs of life; so that all the little piece of intelligence that is left in a man is not enough to make a pin, or a nail, but exhausts itself in making the point of a pin or the head of a nail———」

かくの如く、彼は近代文明の一大特長であり、且又此れなるがために、近代文明が近代的なる所以であるいはゆる『労働の分轄』なるものを見るに、それは (the division of labour) ではなくて、(divided into mere segments of men—broken into small fragments and crumbs of life) と見たのである。然らば此の文明が其のまゝ繼續して行つたならば、果して何うなる？ラスキンは他の所で云つてゐる。

「…… And the catastrophe, forsooth, is to come where we have been making swiftest progress beyond the wisdom and wealth of the past. Our cities are a wilderness of spinning wheels instead of palace; yet the people have not clothes. We have blackened every leaf of English greenwood with ashes, and the people die of cold; our havours are a forest of merchant ships, and the people die of hunger…… (from the future of England, the Crown of Wild Olives.)

かくしてラスキンは近世の資本主義的文明を憎惡するの餘り、可なり頑固なる中世紀論に立て籠つて、騎士を讚美し、生産組織は中世のギルド組織 (guildsystem) を主張し、大經營生産に非らずして、小經營生産を説いたのである。因みにかのウィリアム・モリスの如きは、やはり、ラスキンの流れを汲むもので、モリスにありてはラ氏の如く中世紀論に頑固に固執することなく、百尺竿頭一步を進めて、眼を將來に轉ぜしもので、單なる復古の主張にあらずして、小經營に依る生産を合理的に、將來に於いて實現化せんとせしものである。

ガンデーの如く、近代文明の骨子をなす機械を頭から否定して、凡てを絲車主義化さんとすることは、單なる精神的なもの、乃至は想像上のものとしてならば、いざ知らず、實際問題として果して實現化しうる望みがあるか。今日の人間

は機械の助けをかりて生み出しうる生産物を除いて、單に人間が手で作り得るものだけで、その慾望を満足し得るか。將又、ラスキンの如く、吾人は、資本主義的生産組織を破壊して、guild system の復古を大膽にも要求しうるか。凡そ此れらの問題は已に餘りに多く論ぜられ、如何なる解答を得るかは、已に明白なことであるから、今更らしく論ずるの要はあるまい。マルサスの人口論はその着眼點に於いて、ある程度まで眞なるを得てゐるから、人口が増加し、人間の慾望が増加するならば、而して凡ての人間が飢死しないためには、それに伴つて必然的に、生産物の増如を要求する。生産物を多量に造出するには、大經營の生産組織に依らねばならぬし、大量生産組織は大なる機械を使用することに依つて、即大工業組織に依つて始めて可能である。

然し、此處に於いて、次の如き反對が起るかも知れぬ。

『吾々は電燈汽車、その他機械製の衣服、食糧なしでも生活し得ないことはない。否生活し得るであらう……』と。けれ共、私は、常識あり、且現在の世界の狀態を達觀しうる能力を有する人々と共に、大いなる確信を以つて、No. と答へれば足りるであらう。かくの如き反對に對しては、反駁は余計なものとなるであらう。

※

※

※

#### 一、ガンデーとタゴール

私は餘り、タゴールを知らないから、多くを談ずるを得ぬが、タゴールは已に人も知る通り哲人である、詩人である。彼の哲學の窮極の目的は『生の實現』である。彼は美しい詩句の中に、微妙にその哲學思想をとかし込んでゐる、タゴールもガンデーと共に印度の改革者であると云へやう。彼はその名著『ゴラ』の中で若い一人のヒンツウの革命家を描いてゐる。それは多くの點に於いて、差異を有してゐるとは云へ、ガンデーを思ひ起させるものである。つまり、その中

に説かれてある思想は、全印度國民が大同團結して立ちさへすれば、改革は、自然に、必然に内部から誘致されるものである。と云ふので、主人公「ゴーラ」の人格は又タゴールの「生の實現」の一つではあるまいか。然らばタゴールとガンディーとは何う異なるか。私は考へる。兩人共に一個の眞理に向つて邁進しつゝある、哲人でその點に於いて、何らの差異はなく、只、表面的に見る場合、一は寧ろ哲人肌、詩人肌であるにひきかへ、他は、平凡の中に偉大を有する哲人であり宗教家であり、聖人であると。又兩者の文明觀について見れば、ガンディーは徹底的に、西洋の物質文明を否定し、東洋の精神文明を最高位に置くのに反し、タゴールには必ずしも西洋の物質文明を排斥するものではない。否。それに執はれるのを不可とするに止まつて、決して物質文物そのものの價值をも否定せんとするものではなく、寧ろ東西兩洋の精神的物質的兩文明の融合を唱ふるもので、「二文明が各々一偏で獨立的なるは却つて、その目的を完全に達成し得るものではなく、兩者の完全なる融合を以て初めてその目的を完全に達成しうるとなすものである。私は先に「ガンディーは徹底的に西洋文明を否定」と云つたが、彼の心の根本の根本に於いては、必ずしも否定するものではなく、ダーゴルと同じく、物質文明そのものの價值まで否定はしないので、此の相矛盾した事柄はガンディーの微妙なる心理的内容の中に求めねばならぬ。否定すると同時に、奥の方で肯定する、その心理的狀態に、その心持ちに吾人は充分に同情し得る。此れには現在の印度の狀態と、彼の愛國心と云ふものが可なりに影響を與へてゐるものと見ねばなるまい。ガンディーは祖國を愛するけれ共、それにも増して、彼は眞理を愛する。何故なら、眞に祖國を愛するものは、愛する祖國をして邪道に陥らしむるを欲しないからなのだ。世人々々、かくの如き改革家を指差して、野心家と云ひ、利己主義に出するものだ、名譽心からだと云ふけれ共、吾人は強ち、ガンディーの如き偉人に對して、そうとのみは考へない。寧ろ、人の子の水中に溺れんとする時、吾人の胸中に起る。あの惻隱の心のやうに、利己的でもなく、利他的でもなく、只、人間の原本的本性より迅り出



するものと同様に、かくの如き偉人にありては彼の行動はその苦悶せる同胞を見るととき彼の人間としての原本的本性から  
 卒然として起り来る利己的でも、利他的でもないものの表現ではあるまいか。其處に人間としての彼の眞の偉大さがあつ  
 て、人心を感動させずには置かないのではなからうか。

※

※

※

### 一、ガ氏の無抵抗主義の本領

最後の勝利の冠は無抵抗者の上に置かれる。如何に力が強いと云つても、無抵抗には屈服する。但し、苟しくも、かく  
 云ふ上は普通、人間と言ふ言葉で意味せられる人間を前提として云つてゐることであつて、動物乃至は動物性の極めて多  
 い、獸的人間を前提とするものではなく、實にプラトリーの云ふ如く、事物の中で最大多數を有してゐる中庸なるものを前  
 提したのである。こんな事は何うでもよいとして、假りに、諸君が子供を撲ぐつたとする。所が子供は反抗すると思ひの  
 外、そうはせずに悲しそうに泣き出したとする。其際、諸君は相手の無抵抗から、ある種の恐れを、又は後悔を感じはし  
 ないか。或ひは男が女に對した場合でもよい。女が泣き出したとする、諸君は却つて恐れを感じるだらう「男が弱い、女  
 にかゝつては……」と云ふ事をよく聞くが、その場合、男が弱いのは、女が弱いが故に、そのためにのみ、男は弱いので  
 ある。つまり、その執念深い無抵抗こそ、如何なる暴力をも打ち砕くので、其れこそ正に、無抵抗主義の眞髓であらねば  
 ならぬので、其處に無抵抗の力がある、又トルストイが考へたやうに、暴に報ずるに暴を以てし、報尺以尺することは、  
 その相手がなした悪行者を遂ひに自れも爲すに至つて何等自己辯護の餘地はなくなり、自己も相手も同じになるから、報  
 尺以尺をしてはならぬと考へてもよからう。勿論無抵抗主義は（不徹底の嫌ひはあらうが）政治界などでは問題が自づと別  
 となつて常に功を奏すとは云はれないが、然し、そこは、ガンジーである。彼は南阿に於いて活動中、無抵抗主義をひつ

さげて苦痛の二十年間を過した後、鬼と呼ばれたスママツ將軍に打ち勝つて、印度人の南阿に於ける自由を獲得したではないか。その期間に於いても、ある時は、同志からさへ見棄てられて、一人淋しく、蒸し熱い南阿の獄屋に、やせ衰へた體を横へて、配所の月を眺め乍らも、同志を恨らうとさへしなかつたのだ。何と云ふ信念の力強さだらう。その彼の信念の力強さにも、何物にもまして、貴きものではあるまいか。壓迫するものは勝手に壓迫するがよい。俺はぢつとかうして忍耐してゐるのだ。汝等こそ、何時かは必ず後悔し、敗れる時が来るであらう、此の無形の信念の力強さこそ、やがて如何なる暴力をも打破せずには置かない伏在的な最高強力ではあるまいか。彼の非暴行的反抗こそ、實に此の最高強力と同一のものであらねばならぬので、何時か、近き將來に於いて、印度の英國よりの自治の認許は只單に、彼「ガンデー」その人の一生の努力に對してのみすらも與へらるべきものではなからうか。

※

※

※

## 一、結 語

現代の社會は混沌であると云ふ。然り現代の社會は混沌である。然かも此の混沌の中に二つの大いなる潮流が、觸れては撥ね返し、撥ね返しては、相觸れ、無限の彼方に向つて奔流しつゝ、狂奔しつゝ、一時一刻として止まる時はない。それは國際主義と國家主義との闘争である、いがみ合ひである。喧嘩である。保守主義と進歩主義、町人道と勞人道、資本と勞働、父と子の衝突である。痛ましい、現實の凄慘なる戦ひである。生きんとする人間本能の異なる二つの立場に據る衝突である。兄弟相殺的な戦ひである。それは豚の如き肥滿せる體をソファの上に横へて、葉巻をふかし乍ら、黄金を見つめてゐる資本家を代表する關心と故なくして勞働權と生存權を奪はれて、街上に投げ出された勞働者を代表する關心との衝突である。已に工場内に内訌は起つた。見るがいゝゝ赤い火の手が蛇の舌のやうに、ぬる／＼と世界をなめつてゐる様

を口

人類の過去の歴史は新舊兩潮流のいがみ合ひのリズミカルな現はれに依つて、促進せられて來たし、尙、將來もそうであらう。ローマの政治形態の進化状態を見れば、王政時代より、共和政時代に、更に帝政時代へと變化又は進化しゆく毎に、保守主義と進歩主義との闘争は繰り返されてゐる。或ひは、アリストートルの政治形態の進化に關する二段の循環説も、その政治形態の進化ある毎に、具体的に考へて、新舊を代表する二つの潮流に依つて、その進化なるものが、動かされてゐることを暗示するものである。而して保守主義を代表するものは、其の當時の支配階級であり、進歩主義を代表するものは、其の當時の新興階級である。かくして、新しいものは舊いものを否定し、更にその新しいものが、舊いものとなるに及んで、更に新しいものが現はれて、曾つて、新しくはあつたが、今は舊いものを否定し、此れを要するに、哲學史の發展を支配する、否定の否定の法則に従つて、人類史は發展し來つたのである。碩學カルル、マルクスが、彼の有名な共產黨宣言の冒頭に叫んだ「過去一切の社會の歴史は階級闘争の歴史である……」と云ふ言葉も要するに此の否定の法則を具体的に表現した言葉に過ぎない。」

※

※

※

現代人は疲れてゐる。新鮮味がない。従つて nach Denken しない。思索が足りない。自己認識が足りない。盲目者の暗箱模索である。何んでも、彼でも、行きあたりばつたり、手に觸れさへしたら、手當り次第、それが、砂糖の塊りであるか、犬の糞であるかも確めないで、口に持つて行きつゝありはしないか。自己認識が足りないと云ふのは、つまり、自己を忘却してゐるのだ。破壊である。自己冒瀆である。此れに反して自己認識は自己創造である。日の出前である。歡喜である。狂喜である。吾人は云ほふ。

「自己を忘却するな。自ら新しき何物かに近付かんと終生努力精進せよ。自己を創造せよ。その創造の狂喜の中に、汝自身の新鮮な、自由な、神々しい姿を見出せ。努力し、働くものが勝つものだ。……」

※

※

※

私は、ガンヂーに、それほど心酔してゐるものでもない。寧ろ、彼の頑固な文明觀や、偏よつた愛國主義に反感をすら抱かないわけでもない。然も私は彼の中にある、或る何物かに依つて惹きつけられるやうに感ずる。

※

※

※

日本の現在は荒れてゐる。けれ共、私は停滯した、活氣のない平和は欲しない。寧ろ活氣のある、進取的な、動的な社會狀態を指して平和と呼びたい。將來の歴史は右するか、左するか。今はその過渡期である。過渡期は極端が流行する時代だ。そこに進歩があるのでもある。けれ共吾人としては如何なる態度を取るべきか。極端か。中庸か。途は二つである。何れを取らうと人の勝手だ。けれ共、自己忘却して、漠然と死んでゆくのはつまらない。極端は偏見と頑固にして隨落し勝ちなものだ。けれ共、中庸に名をかつて利己主義に隨落してはいけない。武者小路實篤は云つた「大きくなれ、いぢけるのが一番いけない」と、然うだ、僕もそう思ふ、「いぢけるのが一番いけない」と。

吾々青年に取つて、現在は正に、ラスキンが、いはゆる、「帷をあげよ、光に面せ……」の時代であり、アナトール・フランスが「白き石の上にて：」凡てのものを公平に批判し、自己そのものの姿をも「明るみ：」へ曝け出す時代ではあるまいか。……此の一篇を吾が愛する兄弟等と友人等に與ふ、……大正十四年四月廿七日朝六時十五分、書架にかゝれるマルクスの肖像を見ながらペンを擱く。……

附記 ※※※の記號は作者の了解による學校當局の削除を示す。